02

新居紙器 株式会社

オリジナルパッケージの製造
自動化・内製化でさらに高品質・短納期を実現

事業内容

段ボールと紙加工製品の両方を一貫生産

同社は創業以来、段ボールによる輸送用の箱や梱包用の仕切りなどの製造を行っている。平成21年には、コート紙という板紙で流通用の紙箱や店頭用の商品パッケージなどの製造を開始。段ボール加工製品と紙加工製品はそれぞれ専門の企業で行うことが多いが、同社は両方の製品を自社で製造できる。箔押しなどのオプション加工も自社内で行っているため、さまざまな加工ノウハウを取り入れた提案を行えるのが強みだ。

オリジナルパッケージの製作サービスで小規模店や個人に応える

平成29年には、オリジナルパッケージ製作サービスの「ORiPA（オリパ）」を開始した。材質や色数などを限定した上でデジタル印刷と独自加工技術を組み合わせ、小ロットで多品種のオリジナルパッケージを低価格で短納期対応できる。菓子店などの小規模な小売店の季節限定品や、手作り雑貨を販売する個人の需要を開拓した。パッケージだけでなく、商品に添えるカードなど紙製品であれば広く対応する点も好評だ。

補助事業

貼り加工ラインを自動化して生産量と品質を安定化

パッケージ事業強化のため、主力の八尾工場（大阪府八尾市）の貼り加工ラインの改革に取り組んだ。箱の形状にするために、のり貼りをする工程で、貼り方にもさまざまな種類がある。対応するパッケージメーカーが限られており、需要が見込める。ただ同社では従来、新居章良社長がほぼ1人で貼り加工ラインを管理していたうえ、手作業を含む半自動ラインで加工していたため、生産量や品質の安定が難しかった。そこで「ものづくり補助金」を活用し、貼り加工を自動化できる量産型自動製函（せいかん）グルア機を導入してラインを一新した。

1台で全ての貼り加工ができる独自仕様の装置を導入

箱やパッケージは、材質が段ボールでもコート紙でも製造・加工工程が同じ。そのため、導入した装置は同社の事業に合わせて独自仕様に改造した。コート紙から段ボールまで厚さの違う材質を加工ができ、特殊な貼り方にも対応できるようにするなど、1台でさまざまな貼り加工を行えるようにした。

新居紙器 株式会社

代表取締役社長 新居 章良

〒540-0025 大阪市中央区徳井町1−1−6

TEL. 06-6943-6631 FAX. 06-6943-6637

資本金／15,000千円 従業員／20名

主な取引先／食品業界、アパレル業界、小売店など

主な保有設備／段ボール印刷機、紙パッケージ用印刷機、トムソン箱打ち抜き機、カッティングプロッター、箔押し機など

主力製品／段ボール製品、紙パッケージ、紙加工品など

短納期 企画力 小ロットOK オンリーワン技術 量産OK 試作OK

段ボールと紙器の2本柱で喜んでもらえる製品を提供

代表取締役社長 新居 章良

昭和22年の創業から段ボール一筋でしたが、洋菓子店からの相談を受け試験的に紙パッケージ製造を始め、平成27年から本格的に紙器事業を行っています。ノウハウを組み合わせ、さらに喜ばれる製品を提供します。

https://www.arai-shiki.co.jp/

導入した量産型自動製函グルア機

多様な形状のパッケージを作れる

オリジナルパッケージを受注

具体的成果

自動化により加工時間の短縮と品質向上を実現

導入した量産型自動製函グルア機は全長23m。大型装置を導入するため、工場内の壁を一部抜く改装工事も行った。大規模投資の甲斐があり、従来3—4日かかっていた工程が3—4時間で終わるようになり、大幅に加工速度が向上した。不良品も60—70%減るなど社内の効率化も進み、納期・品質ともに顧客満足度が高まった。さらに従来は依頼を全て引き受けられないだけでなく、かなりの比率で外部委託に頼っていたが、装置導入により内製率が95%を超えるようにもなった。

特定の担当者に依存せず、スムーズに加工と品質管理

全自動で加工を行うため、社員の誰でも貼り加工のラインを担当できるようになった。設定が終われば装置のそばにつききりにならなくても工程が進むため他の業務と並行して担当できるのも、社内全体の効率化の要因だ。

材質や完成する箱の大きさや形状によって装置の設定を変更する必要があるため、できるだけ同じ設定の加工をまとめて行うようにし、より効率性を高めるよう工夫している。装置から直線状に出るのりの量は、加工ごとに設定した長さで一定で、最新鋭のカメラによる自動画像検査で長さや量が規定と違っていれば装置が止まるため、加工と検査が1台でできる。

今後の戦略

同業他社からの加工依頼を引き受け業界活性化に貢献

全自動製函グルア機の導入から1年が経ち、社員も取り扱いに慣れてきた。今後はユーザーからの直接依頼だけでなく、他のパッケージメーカーからの依頼も積極的に受けていく。主に営業を担当する新居慶二常務は「加工の精度・速度ともに伸びしろがある。貼り加工ができる企業が少ないため、どんどん依頼を受けていきたい。同業他社に加工サービスを提供することで業界全体の活性化に貢献できる」と力を込める。

効率的な物流と独自の加工法でフル稼働に備える

同社はパッケージの配送用トラック3台を保有する。完成した製品を配送した帰りに他社からの依頼品を受け取って戻れば、物流も含めて効率的に受注をこなせるとみている。他社からの依頼の状況に応じてトラックや人員を増強し、対応力を高める計画だ。慶二常務は「まだまだ装置が止まっている時間もあるので、毎日フル稼働できるよう、新規顧客開拓と他社からの委託の両輪で注文を受けたい」と意気込む。

独自に改造した装置のため、特殊な貼り方にも対応できる。加工法の研究を重ねて独自形状のパッケージの提案も行っていく。必要に応じてさらに装置を改造していくことも考えられる。

取材を終えて

経験を糧に
業界全体の課題解決へ

同社が従来抱えていた貼り加工の量産力不足という課題は、パッケージ業界全体の問題でもある。貼り加工ができる企業が少ないため多くのパッケージメーカーが外注に依存する中、後継者不足での廃業も多く、さらに特定企業に依頼が集中してこなしきれない状況。同社は補助金を活用してライン自動化に踏み切り、自社への注文を確実にこなせる体制を構築するだけでなく、同業他社のバックアップも可能にして業界内での存在感を高めた。